

## 雲南の養蜂と東方蜜蜂研究所

潭 垦

雲南省は中国南西部、貴州・広西の西、四川の南に位置する高原地帯にあり、ミャンマー、ラオス、ベトナムと国境を接する。面積 39 万 4 千 km<sup>2</sup>、人口約 400 万人、20 余の少数民族が住み、中国で民族の種類が最も多い大きな省である。地理的变化に富み、数種の気候区に分かれるため、雲南省の植物種、動物種は多様、かつ豊富である。

山岳地域が全体の約 9 割を占める雲南であるが、中国に分布する全動植物の約半数が省内で見られる。ミツバチについていえば、国内に生息する全 5 種、すなわちトウヨウミツバチ（東方蜜蜂）、コミツバチ（小蜜蜂）、オオミツバチ（大蜜蜂）、クロコミツバチ（黒小蜜蜂）、ヒマラヤオオミツバチ（黒大蜜蜂）の分布が確認されている。中でも閉鎖空間に営巣するトウヨウミツバチは、雲南の多様な地形、気候のなかで幅広く分布し、その生息数も多い。

トウヨウミツバチを用いた伝統養蜂は長い歴史をもち、地域の人々の風習や宗教の中に深く組み込まれ、文学や芸術でも取りあげられる。

省内で発掘された戦国時代（紀元前 475-221）の鎧には数種の動物が彫られていたが、中にミツバチの姿もあった。ハチミツ、蜂の巣などミツバチ生産物は地元の伝統的漢方薬として、ごく普通に多様に使われている。民族衣装の生地は現在も蜂ろうを使ったろうけつ染めで仕上げられる。ミツバチは愛情、勤勉さ、勇気の象徴として伝説、詩歌、音楽その他の芸術で数多くうたわれている。

雲南に生息するトウヨウミツバチは約 78 万群と推定されるが、可動巣枠式巣箱で飼養されるのは一割程に過ぎない。大多数の蜂群は丸太巣箱、壁の中に空間をもうけた巣箱、その他の形状の巣箱にいる。省内北西部では、海拔 3600m もの冷涼な高原地域に分布している。一方最低地点が海拔 78m である南部地域には熱帯のジャングルが広がり、多数の野生や飼養されるトウヨウミツバチ蜂群がみられる。以前はこのように異なる環境に分布するトウヨウミツバチを 3 種の亜種：*A. c. cerana*（中蜂）、*A. c. himalaya*、*A. c. indica*（印度蜂）に分類してい



図 1 地方の民家におかれた伝統的丸太巣箱



図 2 蜂群を丸太巣箱から可動巣枠式巣箱に移す

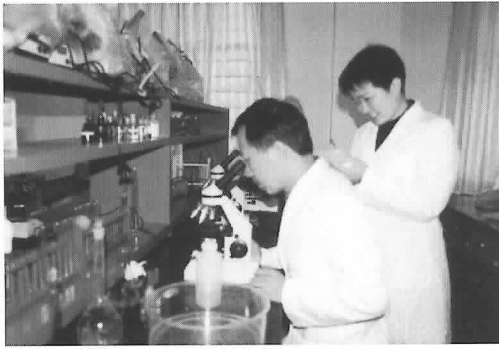


図3 実験室の譚昱博士

た。

1930年代にセイヨウミツバチが導入されて以来、順調に数を増し、現在は10万群にまでなった。この地域で飼養されているのは主に、*A. m. mellifera* (欧州黒蜂)、*A. m. ligustica* (イタリア蜂)、*A. m. caucasica* (高加索蜂) *A. m. cypria* (塞浦路斯蜂)である。養蜂に関する様々な新技術を積極的に取り入れたことにより、ミツバチ生産物の生産高も伸び、2001年の雲南省のハチミツ生産高は6,331t、ローヤルゼリー10.5t、花粉50tであった。

省内の養蜂植物は1,000種を超え、主なものが148種、そのうち75種が販売用ハチミツの蜜源植物である。雲南の天候は乾期(10月から翌年5月)と雨期(6月から9月)に分かれ、ふつう春から初夏が販売用ハチミツ生産の主な時期となる。雨期や寒い時期には、養蜂家は給餌をしてローヤルゼリーの生産を行っている。

昆明にある雲南農業大学の東方蜜蜂研究所は1986年に創立され、省内の養蜂事業の中核として機能している。中国東方蜜蜂養蜂協会の事務局も所内におき、現所長の和紹兎教授が2002年9月に同協会の会長に選出された。匡邦郁前主任教授はアジア養蜂研究協会のミツバチ生物学セクション委員長を務めた。東方蜜蜂研究所の所員総数は15名で、教授1名、助教授3名、講師6名がいる。これまでに国の科学技術研究を5件、省のプロジェクトは10件以上を遂行し、研究報告として300編以上の論文が *Apidologie*, *Journal of Apicultural Research*, *American Bee Journal*, *Bee World*

などの国際誌や中国養蜂、養蜂雑誌など国内の関連雑誌に掲載された。また「蜜蜂生物学」、「東方蜜蜂養蜂」、「雲南の養蜂植物」、「蜜蜂の世界」、「経済昆虫飼育技術」の五冊の書籍も出版されている。

東方蜜蜂研究所にはミツバチ科学研究部門の他に、雲南農業大学で養蜂を専攻する学生を3年間教育する部門がある。300名以上がこの養蜂部門から卒業し、現在も70名の学生が所属している。教員、研究者は農民の養蜂技術を向上させるために、しばしば地方に出張して養蜂研修を実施し、技術指導をしている。

国外の関連研究組織、政府機関、諸団体との連携も盛んで、米国、ドイツ、日本、カナダ、南アフリカ、タイ、パキスタン、インド、ネパールなどの国々と交流があり、これまでに当研究所を訪れた養蜂に関わりを持つ研究者や研修生は200名を超えている。

今後も雲南の養蜂業の発展と、省内のミツバチ資源保護、その適正な利用をめざして、東方蜜蜂研究所の科学者は鋭意努力を続けていく。このことは中国と世界の養蜂にとっても大きな利益をもたらすであろうと私達は信じている。

(著者の住所は下記参照)

翻訳 榎本ひとみ)

#### 参考文献

- 陳耀春. 1993. 中国蜂業. 農業出版社.  
 譚昱, 刘意秋. 2000. 経済昆虫飼養技術. 292pp.  
 Tan K., S. Fuchs and Z. Ruiguang. 2002. Morphometrical characterization of *Apis cerana* in Yunnan Province of China. *Apidologie*, in press.  
 Tan K. 1991. China's beekeeping and the Journal of the Bee. *Am. Bee J.* 131: 459-460.  
 Kuang B. Y. and K. Tan 1996. Honeybee genetic diversity and its value to mountain farming. In: *Proceedings of 3th Asia Apicultural Association Congress, (Vietnam)* p. 28.  
 KEN TAN. Yunnan apiculture and Eastern Bee Research Institute. *Honeybee science* (2002) 23(4): 173-174. Eastern Bee Research Institute of Yunnan Agricultural University, Heilongtan, Kunming, China.